

宮城県における男性の家事・育児遂行の特徴と規定要因

—宮城県調査と他調査の比較から—

藤田 嘉代子

1. はじめに

私的領域において行われる家事は、適切な栄養を摂取し、暖を取り、清潔で健康な生活を送るためなくてはならない労働である。しかしながら、家事は長い間、そして今も女性がするべき仕事であり役割として、性別に特化された文化的な関連付けが行われてきた。

現代日本においては、男性と女性が行っている無償労働に関して大きな隔りがあることは周知の事実である。政府が行う社会生活基本調査において無償労働の代表である「家事」は、男性で19分、女性で144分、「家事関連項目」では、共働き夫婦の夫46分、妻は4時間56分であり、約6倍から7倍女性が多く行っており、他の国々と比べてその偏りは突出している¹。これら家事労働に関するジェンダー非対称は是正されるべき問題であり続けてきた。

一方、男性が家事をわずかしか行わないということは、彼ら自身の日常生活の質を低いものとし、ひいては健康水準を低める可能性につながる。また、家事はまさに無償労働とされているように経済的な恩恵は直接もたらさないものの、どのように行うかによって、生活に快適さだけでなく楽しみや幸福感をももたらす面もある。

男性が家事を行わないということは、単に同居する夫婦間の偏った分担や、子どもに対するケアの不実践という問題だけではなく、彼自身の生活環境についても大きな影響がある。自らのケアを十分行わないことによって、特に中高年齢層の男性で成人病が増加したり、セルフ・ネグレクト、孤独死という現象が出現したりしている。これらの背景にあるのは、男性が衣食住に十分関心を払わず、自分自身をケアする力を十分に身につけていないということである。

私はこのような問題意識に基づき、男性がどの程度家事を実践しているか、また家事スキルをどのように獲得しているかに興味を持ち研究を行ってきた。このように研究を行う中で、男性の家事や育児実践においても、単なる時間の多寡だけではなく、多様な側面があるのではないか。男性が行うのはどのような種類の家事であり、どのような方法が取られているか。また家事量を規定するものとして、同居の家族の状況だけでなく、世代やライフコース、地域によっても違いがあることがわかってきた。

¹ 家事関連項目は「家事」「介護・看護」「育児」「買い物」の合計である。

筆者は、従来行われてきた家事に関する調査に不足を感じ、時間以外の多様な側面、家事スキルを身につける過程や地域性にも着目し、宮城県を中心とした、男性の家事遂行と経験に関する詳細なアンケート調査を実施した。

本論文では調査結果の一部を紹介し、宮城県の男性に見られる家事・育児の遂行と経験における特徴、その規定要因を把握し、男性の家事スキル獲得の地域的な要因の解明に向けて初期的な考察を行う。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

ジェンダーと家事分担に関しては多くの調査と研究がある。

まず日本で行われている主な調査の結果から男性の家事の動向について見ておきたい。社会生活基本調査は家事や家事関連項目の実施時間や行為者率を計測しており、結果については冒頭述べた通りである。男性の家事時間は微増しているものの依然として女性との格差はたいへん大きい。全国家庭動向調査（2019）は、既婚女性を対象とした調査で、妻と夫の家事の遂行状況についての調査項目がある²。夫が行う家事は自身の年齢が若く、妻の従業上の地位が常勤である場合、また自身の帰宅時間が早い場合に実施する割合が比較的高くなる。後述するが、家事の項目では「ゴミ出し」「日常の買い物」「食事の後片付け」「風呂洗い」が週1~2回程度の履行でやや多く見られる。この調査も社会生活基本調査と同様、男性の家事遂行は調査年ごとに微増する傾向が見られる。

一方、家族社会学領域においては夫婦関係研究の一領域として、夫婦間の家事育児の分担について相当の研究の蓄積がある。1970年代から90年代までの夫婦関係研究のレビューによれば、調査データは研究者によってまちまちではあるものの、夫の家事・育児の参加度は妻無職よりも有職の際に高くなる。夫の参加度は家事よりも育児において高い。妻の職業によっても差異があり、看護師や官公庁勤務、民間職の時に高く、自営・パートタイマー・専業主婦の時に低くなる。親と同居、近居などの場合、家事や育児の参加度が低くなる等が見られる（長津・細江・岡村1996）。

さらに90年代前後より夫婦の家事や育児が行われる時間や頻度が何によって規定され、どのような変化の兆しがみられるか、数量的なデータによって検証するという研究が相次ぎ分野として確立した。このようなタイプの研究においては、時間的余裕仮説／相対的資源仮説／ニーズ仮説／性別役割分業観仮説の検証から整理されることが多い³。本調査においては特に

² 第6回全国家庭動向調査（2019）は全国300の調査区に居住する世帯の結婚経験のある女性を対象としている。回収率は86.2%である。

³ Coltrane（2000）は、アメリカの90年代のこの分野のレビューであるが、カップルの家事分担に関

性別役割分業意識に関する項目を設けなかったためこの仮説を検証することは難しい。以下では、日本や海外の研究で言及される3つの仮説とライフステージに着目した仮説について、これまで行われてきた先行研究の知見とともに簡単に述べる。

・時間的余裕仮説

夫婦のうち時間的余裕のあるほうが家事・育児に多くの時間を費やすという仮説である。一般に労働時間が長ければ家事・育児に費やす時間が少なくなる。家事については、松田（2004）が末子6歳未満というライフステージに限って夫の労働時間が減った時に家事量が増えるという点を指摘している。育児については妻の労働時間が多い場合、夫の育児参加日数が増えることが明らかにされている（永井 2004）。共働き夫婦を対象とした石井（2004）では本人や配偶者の労働時間・通勤時間と夫の家事時間に有意な関係は見られなかった。

・相対的資源仮説

夫婦がそれぞれ持っている資源の差が夫婦間の力関係を決め、資源を持っている方が持っていない方に家事や育児を担わせるという仮説である。日本では特に、夫が外で働き収入を得て、妻が家事育児を主に担うことが多いため、夫が家事労働を行うことは少ない。女性のM字型雇用とケアの過剰負担に適合的であるため、多くの研究でこの仮説が支持されている（松田 2004、永井 2004、石井 2004）。

・ニーズ仮説

家族が多かったり、子どもが小さかったりするとケアのニーズが高まり、必要とされる家事や育児も増加する。夫の家事や育児の量と家族のニーズについては関連性があるという知見や、効果はあっても限定的とする研究結果が見られる。松田（2004）では夫の家事遂行については末子6歳未満で有意に増加するものの、子どもなし、または同居子なしといったライフステージにおいても夫の家事が増加することが指摘されている。夫の育児遂行については末子6歳未満のライフステージで増加するが、末子年齢が上昇するほど男性の育児参加日数が減少する。またニーズ仮説の一つとして日本では代替資源仮説と言われる仮説がある。日本では親族との同居や近居が多く、そういった親族関係をサポート源として育児や家事について援助を受ける場合、夫の家事遂行が減少するという知見が複数の研究で支持されている（松田 2004、石井 2004）。

・ライフステージ仮説

ニーズ仮説に準じる知見として、ライフステージによって家事やケアの増減が見られるという仮説である。子育て中の家族であってもそのライフステージにおいて家事の分担の仕方が異なっているが（松田 2004）、高齢者を対象とした家事分担研究においても、妻の健康状態が悪

する仮説の代表的なものを相対資源仮説、時間的余裕仮説、ジェンダー社会化仮説の3点にまとめている。

い場合は夫の家事遂行が増加することが指摘されている (岩井 2004、乾 2015)。

家事や育児にある質的な差異とジェンダー

家事は、ある人にとってはしなければならない作業であるが、別の人にとってはそうとは見なされない、というように、やるべき水準の問題がついて回る。さらにやるべき作業であっても、すぐなのか、時間的余裕がある時でよいのか等優先度の問題もある。洗濯はしなければならないが、掃除はしなくてもよい、というような「大文字の家事」についても個別的な選好がある。また最近はその中核的な家事項目以外にも、さまざまな日常の仕事があるということが『名もなき家事』として注目されるようになった⁴。

このような家事の多様な性質に注目することは、私たちのよりリアルな生活の実態把握につながる。これら家事の質と性別を結び付けた研究が近年見られるようになってきた。

アメリカにおける、ケアの分担とジェンダーの研究動向についてまとめた Coltrane (2000) では女性的な家事は炊事、洗濯、買い物、男性的な家事は修理、芝生刈り、車のメンテナンスなどをあげており、性別中立的な家事として支払いや車の運転を挙げている。

永井 (1992) はこのような家事の質とジェンダーに早くから注目した。共働き夫婦の家事分担に着目し、家事と育児について繰延可能なものとそうでないものに分類し、女性がどのような方略を使ってケアを仕事という二重負担をこなしているか、共働きの夫はどのような種類の家事をしているかを明らかにしている。筒井 (2011) では男性むけの家事と女性むけの家事とされているものをカテゴリー化して、どのような変化がみられるか分析している。妻がフルタイム就労になると夫の家事量は有意に増加するものの、行われる家事は掃除や買い物、ゴミ捨てなど平易なものに限られていることを指摘している。筆者もインタビュー調査から共働き夫婦の家事育児分担について、定型的で機器を使用した効率化しやすいものが夫によって遂行され、マネジメントが必要な家事は妻が多く行っていることを明らかにしている (藤田 2010)。

家事分担を促したり抑制したりする文化的背景 (ライフコース 地域性)

塚本 (2004) は福井県を例に挙げ、共働き率が高い地域であっても必ずしも家庭における男性の家事分担率が高いわけではないことを、性別役割分業意識の強さから解釈している。通勤時間が短く労働拘束時間が短い地方にあっても男性が家事を行うかは地域の特性によって異なっていることを明らかにしている。

男性の家事労働時間についてコーホート分析を行った佐藤 (2010) によれば、平日の「家事

⁴ 梅田悟司 (2019) は育児休業中に家事以外の人々に気づかれない「家事」の多さに気づき「名もなき家事」と命名し実態をコミカルに描いている。

労働」時間や行為者率に関して世代効果があり、近年ほど家事時間が短く行為者率も低くなっており、家事スキルや習慣について世代といった観点から見る必要があることを指摘している(佐藤 2010)。

このように見てくると、家事をどのくらい誰がしているか、ということについても一般的な家事(炊事、掃除や洗濯)だけでは不十分であり、家事の質に注目する必要があること、また地域性や世代、ライフコースなどについても配慮した研究が必要である。すでに明らかになっている知見についてもこれらの観点から見直す必要がある。

本研究においては、地域的なデータである特徴から、男性の家事や育児の量的把握とその規定要因について従来と同様の手法で集計・分析することで、その特徴をあぶり出し、男性の家事・育児遂行について地域的な特性を明らかにするための予備的な考察を行う。

3. 調査方法

本研究におけるデータ収集は「家庭における家事の分担に関する調査」として実施した。調査方法は仙台市内に事業所を持つ会社、官公庁の労働組合を通じて男性の会社員・公務員に調査票を700部配布し任意で回答を依頼とした。有効回答数は401で、有効回答率は57%である。

調査内容は自身と家族の就業や就学の環境、家事・育児の遂行状況、子どもの頃の手伝い、家事をするようになったきっかけ、父親が行っていた家事や子育て等である。

回答者の特徴は、平均年齢47.6歳、全体の9割が職業を持ち、8割が正規雇用の会社員であり、7.2%が役員・経営者であり、4.4%が自営業主か自営業従事者である。89%に配偶者がいる。データの特徴として男性のみを対象としており、相当の規模はあるもののランダムサンプリングではないこと、また正規雇用で既婚者が多いという特徴がある。

本調査における共働きカップルの割合は72%でありこれは宮城県の共働き世帯割合24.6%に対してきわめて高いと言える⁵。

人口や家族から見ると、宮城県は少子高齢化が著しいという特徴がある⁶。産業という点から見ると第一次産業従事者と第三次産業従事者が多い。農漁業に携わる人も多いが、特に仙台は東北唯一の政令都市で行政の中核的な役割を担っており、さまざまな企業の東北地域の窓口となる支社が多く雇用労働者が多い。また、他県から進学や就労のために移動して来る人が多く、一方で幼少期からここで育った人は他出することなく学校卒業後もこの地で暮し続ける人

⁵ 対一般世帯の数値。都道府県ランキングにおいては35位である(「統計でみる都道府県のすがた2021」)。

⁶ 65歳人口割合、高齢単身、高齢夫婦割合が高く、合計特殊出生率が低い(ibid.)。

も多いという特徴がある。

4. 調査結果と既存調査における宮城県男性の特徴

4-1 宮城県調査における男性の家事遂行状況

宮城県の男性が家事や育児をどの程度行っているか、地域的な特徴を他調査から確認しておきたい。社会生活基本調査において、15歳以上男女の家事平均時間（週全体）は87分に対し宮城県は89分である。6歳未満の子どもがいる夫婦の夫の家事関連時間は全国平均82分であり、宮城県は85分となっており、妻は全国平均450分のところ、宮城県では462分となっている⁷。夫の家事関連時間が多い東京都120分（1位）、岩手県99分（4位）などに比べると夫の家事分担が多いというわけではない。日本において子どもを育てている家庭の平均的な偏りは夫の家事関連時間に対して妻のそれは5.5倍であり、宮城県では5.4倍となっている。

本調査において家事項目として挙げたのは、「日常のゴミ捨て」、「資源ごみを捨てる」、「食材や日用品の購入」、「部屋の掃除」、「風呂掃除」、「トイレ掃除」、「玄関・ベランダ掃除」、「洗濯（洗濯機使用）」、「洗濯（手洗い）」、「洗濯ものを干す」、「洗濯ものを取り入れる」、「乾いた洗濯もの畳む」、「乾いた衣類を収納する」、「朝食調理」、「夕食調理」、「弁当の調理」、「食事の後片付け」、「ペットの世話」といった18項目であった。そのうちの16項目についてグラフで表したのが図1である。

これに対して全国家庭動向調査では主要な家事の7種類について同じ頻度項目で調査している（図2）。「ほぼ毎日（毎回）」から「週に1~2回くらい」までを日常的に行われている頻度として見ると、全国調査においては5割を超えるものがほとんどないが、本調査においては「ゴミ出し」、「日常の買い物」、「部屋の掃除」、「風呂洗い」、手洗い以外の洗濯関連項目（「洗濯機を使用した洗濯」、「洗濯ものを干す」、「洗濯ものを取り入れ」「洗濯もの畳み」）、「食事の後片付け」で半数を超えている。特に「週1~2回」以上実施されている家事として、「ゴミ出し」、「日常の買い物」は7割、「食事の後片付け」は8割を超えており、全国調査と比較すると特に高い実施率と言える。全国家庭動向調査で「まったくしない」という層が、「部屋の掃除」、「風呂洗い」、「洗濯」、「炊事」、「食事の後片付け」などの項目での4割前後が見られる。一方、本調査においては、「まったくしない」は「風呂洗い」や「部屋の掃除」で1割強、「洗濯」で3割、「食事の後片付け」で1割未満となっており両調査を比較すると、宮城県男性の家事遂行の程度が高いことがわかる。

⁷ いずれも15位と11位。

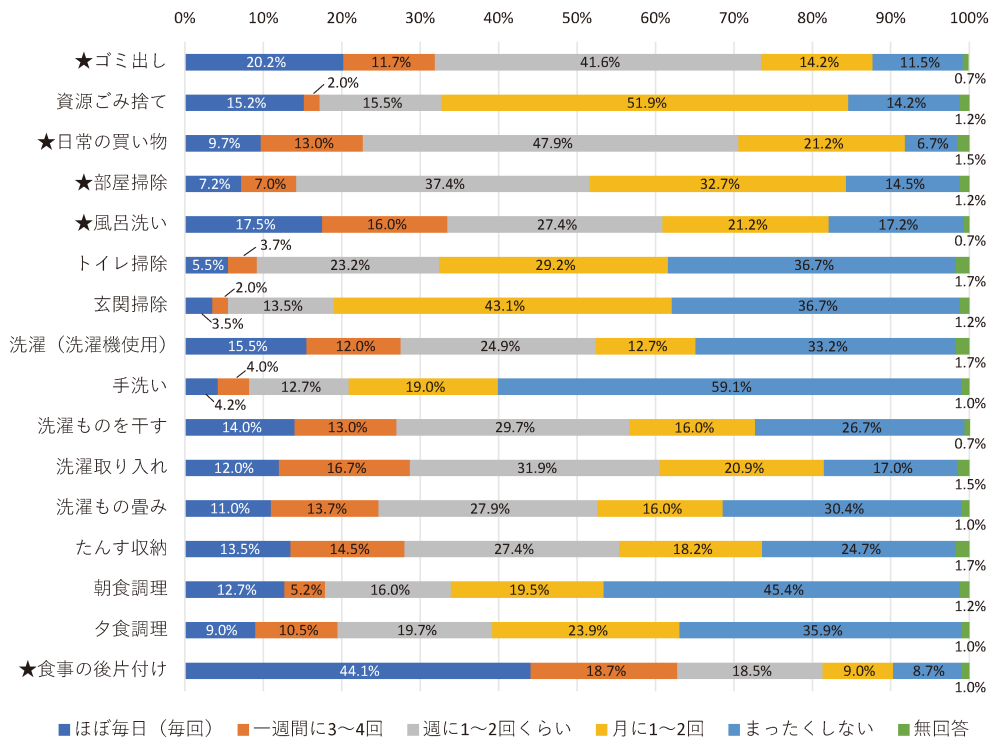


図1 種類別にみた男性の家事遂行頻度の割合 (自身の回答)

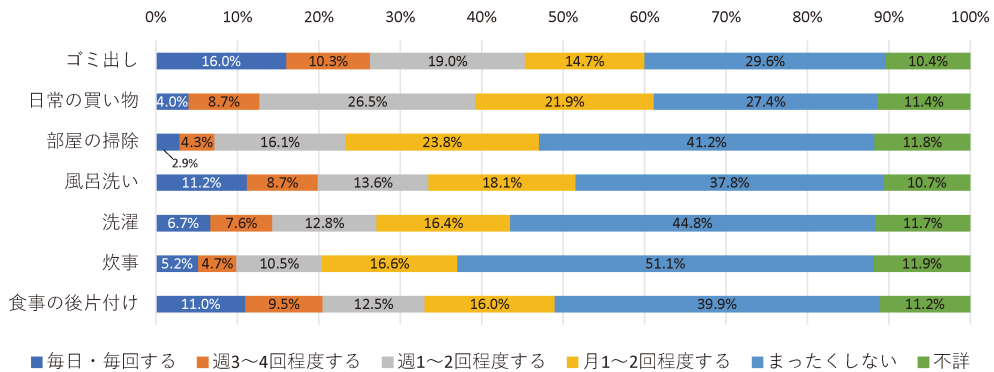


図2 家事の種類別にみた夫の家事遂行頻度の割合 (妻の回答) 第6回全国家庭動向調査

4-2 名もなき家事~見えない家事の認識と遂行~

本調査においては、「見えない家事」として図3にみるような13項目挙げ、「私」「どちらか」というと私」「どちらかという配偶者」「配偶者」「その他の家族」「誰もしない」といった

宮城県における男性の家事・育児遂行の特徴と規定要因—宮城県調査と他調査の比較から—
 (藤田 嘉代子)

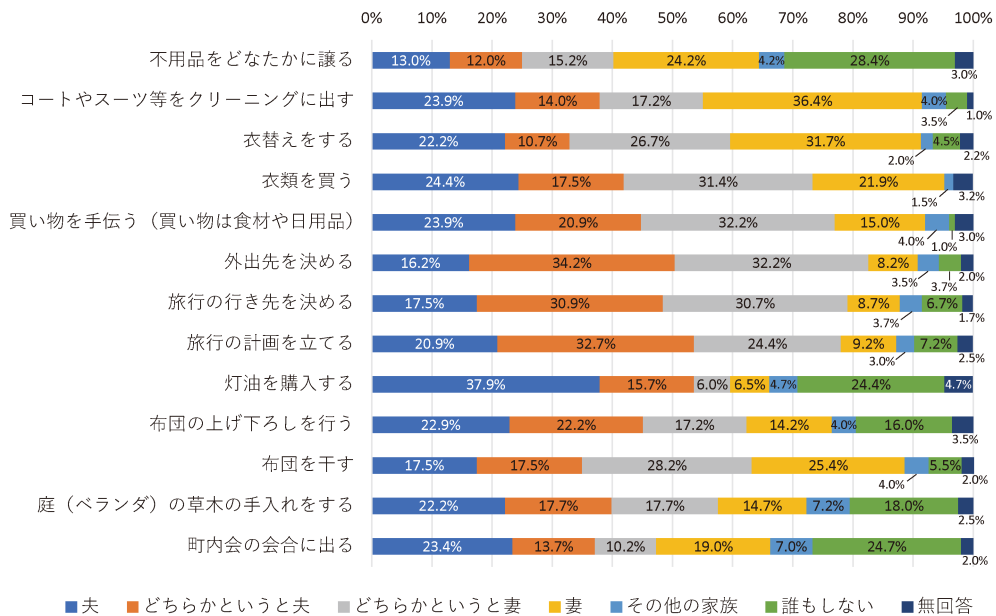


図3 見えない家事の遂行状況(N=401)

担当者を問う選択肢で調査を行った。

夫および男性がする家事項目は「灯油を購入する」が突出して高い。その他は「コートやスーツをクリーニングに出す」「衣類を買う」「衣替えをする」など衣生活にかかわること、「布団の上げ下ろし」「園芸」「町内会などへの出席」が多い。

また、「夫」「どちらかという夫」という回答を含め夫の分担となっているものとしては「旅行の計画を立てる」「旅行の行き先を決める」「外出先を決める」「買い物を手伝う」なども挙げられている。

一方、女性が多く行っているものは、「コートやスーツをクリーニングに出す」「衣替えをする」「衣類を買う」「買い物を手伝う」「布団を干す」といった日常的な「見えない家事」であった。女性・妻だけが行っている項目としては、「不用品を譲る」が挙げられる。

全体として、「コートやスーツ等をクリーニング出す」「衣替え」「布団の上げ下ろしを行う」などは一部の男性が自身の家事として行っている。また「布団の上げ下ろし」や「灯油購入」など重いものの持ち運ぶものを除くと「外出先を決める」「旅行の行先を決める」「旅行の計画を立てる」といった、楽しい要素のある家事についてはかなり平等な分担が見られる傾向がある。

4-3 本調査から見える父親の育児遂行状況

育児についても本調査と全国家庭動向調査を比較すると、概ね宮城県の実施率が高くなっている。子どもが3歳頃までの育児として、「子どもをあやす」「子どもと屋外で遊ぶ」は「ほぼ毎日（毎回）」から「週1~2回」まででほぼ8割から9割の実施率となっているのに対して、家庭動向調査では「遊び相手をする」が6割となっている。「風呂に入れる」が本調査では9割弱となっているのに対して家庭動向調査では5割程度、「寝かせつける」が本調査では7割に対して家庭動向調査では3割弱、「送迎する」が本調査4割に対して家庭動向調査で2割強となっている。

本調査と家庭動向調査のほぼ同様の項目「子どもをあやす」「子どもと屋外で遊ぶ」「風呂に入れる」については「まったくしない」はほぼゼロに近く、「寝かせつける」「おむつを替える」なども1割弱となっているが、家庭動向調査では「おむつを替える」「寝かせつける」などの不実行は2割となっている。

子どもが就園就学期にあたる項目では、本調査と家庭動向調査では選択肢のワーディングがやや異なっているが「あなたと子どもだけで出かける」が「いつも行く・する」「時々行く・する」で7割、家庭動向調査では「子どもと一緒に遊ぶ」が「いつも行く・する」から「時々行く・する」までで6割、「子どもと会話する」が本調査で同8割、家庭動向調査で同6割、「子供に勉強を教える」が本調査で同6割強が、「勉強の手助け」で家庭動向調査が3割、「保護者会・個人面談に参加する」が本調査で4割強、家庭動向調査で1割強となっている。

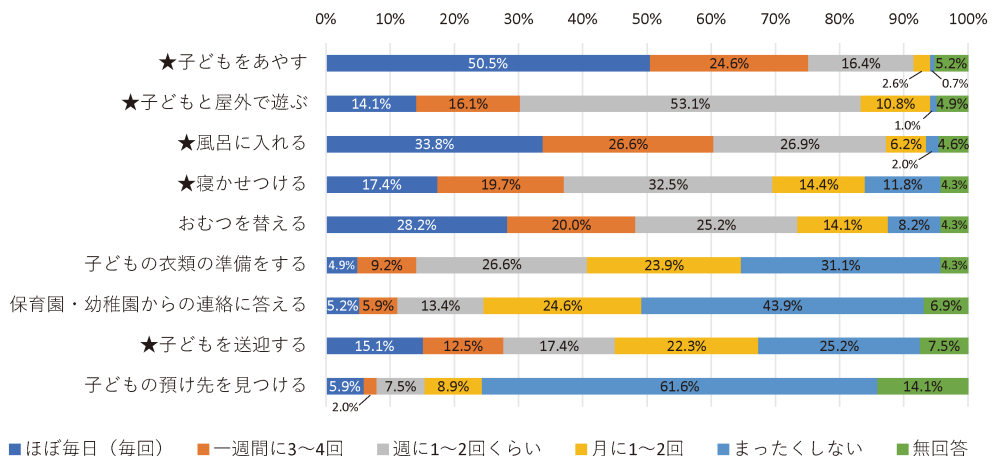


図4 種類別にみた父親の育児事遂行頻度の割合（自身の回答）

宮城県における男性の家事・育児遂行の特徴と規定要因—宮城県調査と他調査の比較から—
(藤田 嘉代子)

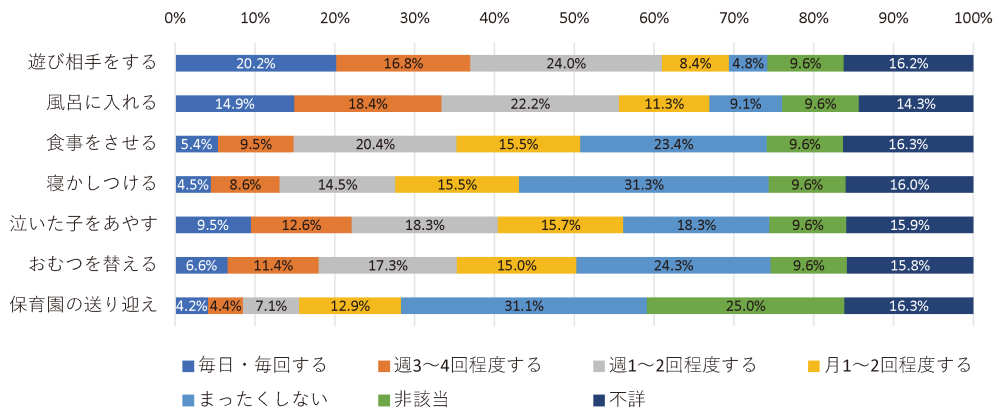


図5 種類別にみた夫の育児遂行頻度の割合（妻の回答） 第6回全国家庭動向調査

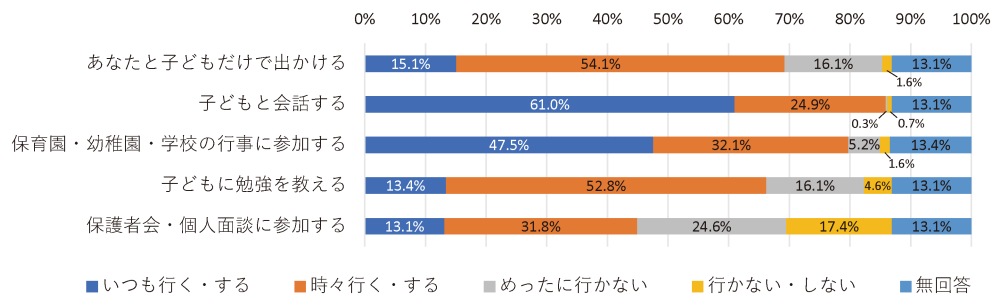


図6 種類別に見た父親の育児事遂行頻度の割合（学童期、自身の回答）

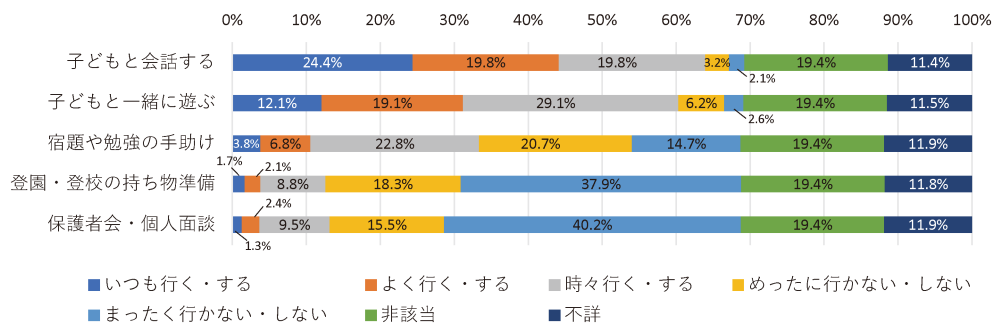


図7 種類別に見た夫の育児遂行頻度の割合（学童期、妻の回答） 第6回全国家庭動向調査

5. 宮城県男性の家事の規定要因

本調査において宮城県の男性が実際行っている家事の量とその他の規定要因を探るために重回帰分析を行った。使用する変数は以下の通りである。

従属変数は家事の性質に応じてグループ化して合計した指標を5パターン作成した。「ほぼ毎日」を7、「一週間に3~4回」を3.5、「週に1~2回」を1.5、「月に1~2回」を0.5、「まったくしない」を0として合計してもっともよく行う人の数値が高くなるような連続変数を作成した。

1) 【日常的な家事】最も日常的に必要な家事項目として、「日常のごみ捨て」「買い物」「洗濯機使用の洗濯」「風呂の掃除」「部屋の掃除」「朝食の調理」「夕食の調理」「炊事後片付け」8項目の合計。

これを特徴ごとに4つに分けて、さらに必要と思われる家事項目を足し合わせた。

2) 【不可欠な最小家事】日常的に必須で他のことで代替しにくい家事であり「男性の家事」とも「女性の家事」とも言えないものである。「日常のごみ捨て」「買い物」の2項目をあげた。

3) 【洗濯関連家事】として「洗濯機を使用した洗濯」「手洗いの洗濯」「洗濯ものを干す」「洗濯ものを取り入れる」「乾いた洗濯ものをたたむ」「乾いた衣類を収納する」の6項目の合計。

4) 【掃除関連家事】として「風呂の掃除」「部屋の掃除」「トイレの掃除」「玄関ベランダの掃除」の4項目。

5) 【調理関連家事】調理は複数の作業工程からなるマネジメントが必要な家事で「女性むけの家事」の代表である。「朝食の調理」「夕食の調理」「弁当が必要な際の調理」「炊事後片付け」の4項目の合計。

独立変数は、家族のニーズを表すものとして、「子どもの有無」「子どもの数」「末子6歳以下ダミー」「末子7歳から18歳ダミー」「末子18歳以上ダミー」「同居の親の有無」を採用した。相対的資源を表すものとして「本人収入」「妻収入」「夫正規ダミー」「夫非正規ダミー」「夫自営ダミー」「妻正規ダミー」「妻非正規ダミー」「妻自営ダミー」「妻専業主婦ダミー」を作成して投入した。本人収入は調査票における選択肢カテゴリーから数値化した。例えば「なし」は0、100万未満を100、100~199万円を200とし、最大は1200である。また時間的余裕を表すものとして、「夫勤務時間」「夫通勤時間」を、統制変数として「本人年齢」と「妻年齢」、学歴を表すものとして大卒かどうかを示す「本人大卒ダミー」「妻大卒ダミー」を投入した。

以上の変数についての記述統計量は表1の通りである。

表1 分析に用いた変数の記述統計量（家事）

	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差
家族のニーズ			ごみ捨て回数	2.00	2.10
子どもの有無	0.77	0.42	資源ごみ捨て回数	3.09	2.07
子どもの数	1.55	1.06	買い物回数	2.03	1.74
末子6歳以下ダミー	0.21	0.41	風呂掃除回数	2.46	2.40
末子7歳から18歳	0.22	0.42	トイレ掃除回数	4.02	2.51
末子18歳以上	0.32	0.47	部屋掃除回数	2.79	2.08
同居の親の有無	0.15	0.36	ベランダ掃除回数	4.34	2.24
相対的資源			洗濯回数	3.26	2.85
本人収入	618.77	271.09	手洗い回数	5.06	2.51
妻収入	276.36	239.83	洗濯干し回数	2.96	2.67
夫正規ダミー	0.73	0.45	洗濯取入れ回数	2.52	2.34
夫非正規ダミー	0.05	0.23	洗濯畳み回数	3.21	2.73
夫自営ダミー	0.04	0.20	洗濯収納回数	2.90	2.62
妻正規ダミー	0.48	0.50	朝食調理回数	2.90	2.62
妻非正規ダミー	0.33	0.47	夕食調理回数	3.74	2.70
妻自営ダミー	0.04	0.20	弁当調理回数	5.60	2.38
妻専業主婦ダミー	0.28	0.45	後片付け回数	1.31	2.05
時間的余裕					
勤務時間	9.06	1.83		平均値	標準偏差
通勤時間	0.41	0.34	日常家事8項目	20.42	11.96
統制変数			最小家事項目	4.03	3.14
本人年齢	47.61	13.07	洗濯関連家事	19.83	12.77
妻年齢	47.17	12.12	掃除関連家事	13.67	7.02
本人大卒ダミー	0.48	0.50	調理関連家事	13.57	6.67
妻大卒ダミー	0.29	0.46			

独立変数では子どものいる父親がほぼ8割、子どもの数は平均して、1.5人であり、1割強が親との同居である。男性本人の年収平均は概算600万円強で、配偶者は270万円強となっている。個別家事については、資源ごみ捨て回数が週当たり3回となっており、ごみ捨てや買い物は週当たり2回、掃除では部屋掃除が2.7回であり、風呂掃除が2.4回、トイレとベランダが4回強、洗濯では3.2回、手洗いは5回、その他洗濯の関連作業も週当たり2~3回となっており、日常的に行われていることがわかる。調理関係では朝食は週当たり2.9回、夕食が3.7回、弁当調理が5.6回となっており高い頻度で行われている。

次に宮城県における男性の家事量の規定要因について重回帰分析の分析結果を述べる。係数

表2 男性の家事遂行を規定する要因

説明変数	標準化偏回帰係数				
	日常家事8項目	最小家事項目	洗濯関連家事	掃除関連家事	調理関連家事
家族のニーズ					
子どもの有無	-.171 ⁺	-.177	-.193	-.726**	.074
子どもの数	.126	.169 ⁺	.090	.128	-.014
末子6歳以下ダミー	-.010	-.047	.110	.462 ⁺	-.069
末子7歳から18歳	.065	.117	.082	.643*	-.188
末子18歳以上	-.132	.037	-.095	.484 ⁺	.027
同居の親の有無	.122*	.227**	.068	.004	.012
相対的資源					
本人収入	-.020	.055	-.114 ⁺	-.056	-.029
妻収入	-.173 ⁺	-.218*	-.185 ⁺	-.055	-.208 ⁺
夫正規ダミー	-.065	.055	-.126	.010	-.076
夫非正規ダミー	.003	.058	-.126 ⁺	.016	.070
夫自営ダミー	.015	-.008	.004	.122 ⁺	-.021
妻正規ダミー	.033	-.179	-.054	.372	.305
妻非正規ダミー	.176	-.162	.053	.461 ⁺	.391
妻自営ダミー	.018	.005	-.056	.039	.078
妻専業主婦ダミー	.088	.067	.016	.105	.017
時間的余裕					
勤務時間	.064	.062	.032	.012	.139*
通勤時間	-.057	-.051	-.069	-.059	-.048
統制変数					
本人年齢	-.083	-.106	-.064	-.191	-.033
妻年齢	.374*	.064	.439*	.480*	.313
本人大卒ダミー	-.029	.053	-.050	.002	-.046
妻大卒ダミー	.010	.042	-.031	.056	.027
(定数)	7.001	4.057	12.603	2.516	3.173
R2乗	.276	.161	.269	.213	.181

** : $p < 0.01$, * : $p < 0.05$, + : $p < 0.10$

はすべて標準化偏回帰係数である。

1) 【日常的な家事】を従属変数として行った分析では説明力が27.6%あり、「妻年齢」「同居の親の有無」が5%水準で、「子どもの有無」「妻年収」が10%水準で有意であった。妻の年齢が高く、子どもはいないライフステージの時に男性の家事量が増える。

2) 【不可欠な最小家事】を従属変数とした場合では、モデルの説明力は16%であり、やは

り「妻年収」「同居の親の有無」「子どもの数」が有意である。「ごみ捨て」「買い物」は妻が専業主婦であり、子どもの数が多い時、また逆のようにも思えるが同居の親がいる時に増加する家事ということになる。

3) 【洗濯関連家事】を従属変数とした分析では、モデルの説明力は26.9%で今回行った解析では比較的高い説明力を持つ。「妻年齢」が5%水準で有意、「本人年収」「妻収入」「夫非正規ダミー」が10%水準で有意である。妻の年収が低くて年齢が高くなった時、また本人が非正規雇用でなく、年収が低い時に男性の洗濯関連家事が増加する。

4) 【掃除関連家事】を従属変数として行った分析の説明力は21%程度であり、「子どもの有無」が1%水準、「末子7歳から18歳までダミー」「妻年齢」が5%水準、「末子6歳以下ダミー」「末子18歳以上ダミー」「夫自営ダミー」「妻非正規ダミー」が10%水準で有意であった。子どもがいないときか、子どもがいる時、妻の年齢が高く非正規雇用の仕事についている時、男性の掃除関連の家事が増える。他の従属変数と異なり、夫の自営ダミーと弱い関連が見られたことも特徴的である。自営のような公私の分離があまり明確でない働き方の場合、男性が掃除関連の家事を行いやすいということになる。

5) 【調理関連家事】では、モデル説明力は18%であった。「夫勤務時間」が5%水準、「妻年収」が10%水準で有意であった。夫の勤務時間が増える時と妻の年収が低くなる時に男性の調理関連の家事時間が増えるという結果であった。

6. 宮城県男性の育児の規定要因

本調査において宮城県の男性が実際行っている育児量とその規定要因を探るために重回帰分析を行った。使用する変数は以下の通りである。

従属変数は育児の性質に応じてグループ化した指標を6パターン作成した。家事の場合と同様、「ほぼ毎日」を7、「一週間に3~4回」を3.5、「週に1~2回」を1.5、「月に1~2回」を0.5、「まったくしない」を0とした。幼稚園から小学生までの質問項目においては尺度を「いつも行く・する」「時々行く・する」「めったに行かない」「行かない・しない」の4点尺度であったため、それぞれ3,2,1,0を与え合計して得点化を行った。以下の通り、グループごとに合計してもっともよく行う人の数値が高くなるような連続変数を作成した。

- 1) 【遊び】「子どもをあやす」「お子さんと屋外で遊ぶ」の2項目の合計。
- 2) 【世話】「風呂に入れる」「寝かせつける」「おむつを替える」「子どもの衣類の準備をする」「お子さんの送迎をする」の5項目の合計。
- 3) 【マネジメント】「保育園・幼稚園からの連絡に答える」「子どもの預け先を見つける」の2項目の合計。

- 4) 【参加型育児】「保育園・幼稚園・学校の行事に参加する」
 5) 【学習】「子どもに勉強を教える」
 6) 【学童期の育児】「あなたと子どもだけで出かける」「子どもと会話する」「保育園・幼稚園・学校の行事に参加する」「子どもに勉強を教える」の4項目の合計。

独立変数は家事の分析から「子どもの有無」を除き同じとした。独立変数の記述統計量を表3に示す。「子どもをあやす」は週当たり4.9回であり、ほぼ毎日、それ以外の「風呂に入れる」も4回弱、「おむつを替える」も3.26回であり、子どもが小さい時の世話において日常的なかかわりが見られる。学童期の育児は3~0の数値を与えた平均値であるため相対的に値が低くなるが、こちらも「子どもと会話する」「保育園・幼稚園・学校の行事に参加する」「あなたと子どもだけで出かける」などは頻度が高いことがわかる。

表3 分析に用いた変数の記述統計量（育児）

	平均値	標準偏差
3歳までの育児		
子どもをあやす	4.91	2.36
子どもと屋外で遊ぶ	2.52	2.06
風呂に入れる	3.91	2.48
寝かせつける	2.57	2.37
おむつを替える	3.26	2.65
子どもの衣類の準備をする	1.24	1.69
保育園・幼稚園からの連絡に答える	0.96	1.73
子どもを送迎する	2.02	2.47
子どもの預け先を見つける	0.74	1.82
就園・就学期の育児		
あなたと子どもだけで出かける	1.95	0.66
子どもと会話する	2.68	0.52
保育園・幼稚園・学校の行事に参加する	2.45	0.70
子どもに勉強を教える	1.86	0.73
保護者会・個人面談に参加する	1.47	0.98
	平均値	標準偏差
遊び2項目	7.45	3.67
世話5項目	12.87	8.56
マネジメント	1.73	3.14
園・学校の行事に参加する（再掲）	2.45	0.70
子どもに勉強を教える（再掲）	1.86	0.73
学童期育児 4項目	8.95	1.86

宮城県男性の育児の規定要因について、家事分析の場合と同様、重回帰分析を行った。分析結果は表4の通りである。

1) 【遊び】を従属変数として分析は説明力が8%である。統計的に有意な係数は少なく10%水準で見た時に有意であった標準化偏回帰係数は「妻年収」のみである。妻の年収が高ければ、夫の「遊び」が増加する。

2) 【世話】5項目を従属変数とした分析は説明力が15%であり、やはり「妻年収」が10%

表4 夫の育児を規定する要因

説明変数	標準化偏回帰係数					
	遊び	世話	マネジメント	行事	学習	学童期
家族のニーズ						
子どもの数	-.002	-.068	.030	-.015	.016	-.037
末子6歳以下ダミー	.342	-.273	.346	-.394	.553*	.120
末子7歳から18歳	.282	-.312	.280	-.337	.494 ⁺	.168
末子18歳以上	.074	-.436	.235	-.409	.379	-.064
同居の親の有無	.030	-.054	-.149 ⁺	-.164*	-.113	-.199*
相対的資源						
本人年収	.012	-.013	-.112	.184	-.082	.001
妻年収	.211 ⁺	.199 ⁺	.118	.089	.086	.065
夫正規ダミー	.159	.058	.143	.160	.117	.211*
夫非正規ダミー	.059	.066	.059	.116*	.037	.031
夫自営ダミー	.046	-.058	-.030	.170 ⁺	.049	.105
妻正規ダミー	.083	.270	.278	.503*	.630*	.532 ⁺
妻非正規ダミー	.069	.171	.142	.540	.687*	.541*
妻自営ダミー	-.012	.124	.189	.106	.292*	.154
妻専業主婦ダミー	.072	-.014	-.136	-.068	-.017	-.070
時間的余裕						
夫勤務時間	-.083	-.008	.050	-.003	.144 ⁺	.077
夫通勤時間	-.040	-.040	-.011	.079	.088	.072
統制変数						
本人年齢	.340	-.129	.151	.405 ⁺	.285	.389 ⁺
妻年齢	-.131	.081	-.020	-.439*	.000	-.200
本人大卒ダミー	.013	.020	-.002	-.015	.062	.032
妻大卒ダミー	-.033	.033	-.040	-.061	.011	.036
定数	1.070	16.985	-4.293	1.785*	-1.486	3.758 ⁺
R2乗	.087	.155	.129	.182	.127	.156

**：p<0.01, *：p<0.05, ⁺：p<0.10

水準で有意であった。

3) 【マネジメント】を従属変数とした分析においては「同居の親の有無」が10%水準で有意であり、同居の親がいないときマネジメントに関する男性の育児が増加する。

4) 【参加型育児】を従属変数とした分析においては、5%水準で有意だったのが「妻正規ダミー」「妻年齢」「同居の親の有無」「夫非正規ダミー」であった。10%水準で有意だったのが「本人年齢」「夫自営ダミー」であった。同居の親がおらず妻の年齢が低いこと、また妻が正規雇用の労働についている場合、夫のこの育児のあり方が増加する。また本人の年齢が高く非正規の仕事に就いている時、また自営など時間の融通が利く職業の場合男性の行事参加型育児が増加する。

5) 【学習】を従属変数とした分析では、5%水準で有意だった係数は「末子6歳以下ダミー」「妻正規ダミー」「妻非正規ダミー」「妻自営ダミー」であった。また、「末子7歳から18歳ダミー」と「夫勤務時間」が10%水準で有意であった。子どもが小さかったり、就学期にあたりする子どもの年齢によって、また妻が正規職／非正規職／自営問わずなんらかの仕事についている場合に、夫の子どもに対する学習のサポートが増加する。夫の勤務時間の増加と弱い相関の関係が見られることから、このタイプの育児は時間的余裕仮説の枠組みではとらえられないということが分かった。

6) 【学童期の育児】を従属変数とした分析では、5%水準で有意だったのが、「同居の親の有無」「夫正規ダミー」「妻非正規ダミー」であった。10%水準で有意だったのが「本人年齢」と「妻正規ダミー」であった。親が同居していないときと、本人が正規職についており年齢が高い時、妻が非正規もしくは正規など雇用されて働く場合夫の学童期の育児が増加している。

7. 考察

7-1 男性の家事について

宮城県の男性を対象とした調査から得られた男性の家事遂行量の規定要因を分析したところ、いずれの家事の種類についても妻の年収が低く妻の年齢が高い方が、また子どもがいない方が男性の家事の遂行量が増加するという結果が得られた。特に【日常的な家事】【不可欠な最少家事】は妻が専業主婦か年収の低い仕事についており、年齢が上がる時に男性の家事量が増える傾向が顕著である。これは「資源を持っている方が持たないほうに家事をさせる」という相対的資源仮説のベクトルは逆の結果となり興味深い結果である。夫の収入が高く、妻の収入が低いという夫婦のライフスタイルは性別役割分業と見なされやすいけれども、逆に夫は家事を多くするという「協働型」もしくは「妻のサポート型」という解釈が可能である。また子どもに関する変数を見た場合、子どもがいないか子どもの数が多い時に男性の家事量が増加す

るといことが見られる（【日常的な家事】や【不可欠な最少家事】【掃除関連家事】）。このような傾向は松田（2004）でも見られた。子どもがいない場合に家事が増えるというのは、男性の職業との関連が見られそうだが、本調査でのデータで有意な関連は見いだせなかった。ただ言えるのは、子どもがいないライフスタイルの場合の決まった家事量や決まったやり方のほうが、男性が家事をしやすい面がありそれが数字に表れたのではないかと思う。

また男性の家事量と男性本人に関する係数が有意な関係であることは少なく、【洗濯関連家事】では「本人年収」や「夫非正規ダミー」（-）が、掃除関連家事では「夫自営ダミー」がかるうじて有意であり、一方【調理関連家事】では「夫勤務時間」（+）が有意であった。「本人年収」が雇用労働の疑似関係を表している係数と見れば、サラリーマンなど人との交わりのある職務の場合のみだしなみに清潔さが求められやすい面が影響したとも考えられる。また自営業に従事している場合は雇用労働のように通勤や勤務時間が一定ではなく時間の融通が利きやすいために、自宅にいる時間が長くなるケースがあり掃除関連の家事量が増えていると見られなくもない。「調理関連家事」は解釈が難しいが、勤務時間が長くなれば増加するという特徴が見られたことから、必要不可欠な家事というよりは本人の嗜好性の強い家事であると言えるだろう。

男性本人の家事量と配偶者の係数が有意であるのは、「妻年齢」や「妻年収」（-）であり、妻の就労形態などとはかかわりを持たなかったのが特徴的であった。したがって、相対的資源仮説よりは、高齢カップルの家事分担分析にみられるような、妻の年齢が上がって健康状態が悪化したときに夫がする家事が増加するという伴侶性と家事遂行の関連性が感じられた⁸。従来の仮説で言えば、ニーズ仮説もしくはライフステージ仮説として考えることができる。また、同居の家族がいる方が男性の家事遂行が増えるという特徴も見られ、この点は従来の代替資源仮説の検証結果と逆である。男性の家事は家族のサポートとして行われるという特徴がここでも出ているように思う。

7-2 男性の育児遂行

従来の研究においては男性の育児は「遊び」が多く、「世話」はあまりしないという特徴が指摘されていたものの、本研究ではそのような住みわけは見られず、またそれらの育児量を増やす規定要因として挙げたのは唯一「妻の年収」であった。したがって「遊び」や「世話」といった育児については相対的資源仮説からの解釈が可能であり、妻が収入という資源を多く持った時に夫の育児が増えるということになる。また、「マネジメント」は「同居の親の有無」の増加によって説明される部分が相対的に多かったことから代替資源仮説による解釈が可能で

⁸ この点は岩井（2004）乾（2015）が指摘している。

ある。

【参加型育児】【学習】【学童期の育児】といった育児については有意であった変数も多く解釈が上記三つに比べて複雑な要因が表れていると言える。これらは本人が正規雇用についていたり、年収が高かったりすることがプラスに働くなど、本人の雇用環境が安定していることに加え、妻が雇用労働についていることがどちらも有効であった。よって相対的資源として一方の資源を持っている側が他方にこの育児という作業をさせるというよりは、夫の側も妻の側も雇用労働についていることが夫の育児を増加させていると解釈できる。つまり妻は何らかの雇用労働に就き、夫も安定した仕事を持つカップルであるということ（共働き／パワーカップル）が夫の育児を増加させる側面を持っている。

この点は、本調査において提示した男性の家事の規定要因についての分析結果とは異なっている。男性の家事量は妻が仕事を持っていないもしくは年収がより低い方が増加しており、働き方では性別役割分業スタイルではあるが家事においては男性がそれサポートする形となっていた。育児においては、どの種類においても夫の育児量と妻の雇用形態や年収、夫の雇用形態など夫婦の資源との関連が見られた。育児に関しては、夫も妻がともに働きともに子育てするという協働的なスタイルになってきていることが分析結果に表われたと言えよう。

おわりに

本研究では筆者が行った宮城県における男性の家事・育児遂行についてのアンケート調査の結果を分析し、地方における男性の家事育児の遂行の特徴を明らかにしようとするものであった。一般的な調査の中に設定される家事の項目は、社会生活基本調査であれば「家事」や「買い物」、「子育て」のみ、全国家族調査においても、「食事の用意」「食事の後片付け」「食品や日用品の買い物」「洗濯」「掃除」だけである。それに対して、本研究においては家事や育児のより具体的な中身に基づいた詳細な調査項目を設定し分析を行った特徴がある。

本研究を通じて明らかになったことの一つは男性の家事遂行と育児遂行については異なる要因に拠っているという点である。育児については近年多くの研究で見られる妻の年収や雇用形態によって夫の育児が増加するというモデルが見られた。家事の分析においては、多くの先行研究で支持されている相対的資源仮説に適合しないモデルが見られた。妻の年齢が上がったり、妻の年収が低下したりする時に夫の家事が増えるのは従来の知見とは逆である。このような男性と家事のあり方が地域性に由来するものか、今回の分析からは不明である。しかしながら、本調査では定位家族でのしつけや父親の家事・育児の遂行、アルバイト等において家事に類する職務の経験があるかなど、家事スキルの獲得に関する調査項目も含んでいる。これらの要因がどこからくるものか、さらに分析をすすめていきたい。

本研究は、平成30年度～令和3年度科学研究費助成事業（若手研究）課題番号18K12940『現代男性の生活マネジメントに関する基礎的研究』（研究代表者：木村嘉代子（藤田））の研究成果の一部である。

文献

- 藤田嘉代子 2010「家事労働再考—マネジメントの視点を中心に—」『女性学年報』31号、日本女性学研究会・女性学年報編集委員会
- 長津美代子・細江容子・岡村清子 1996「夫婦関係研究のレビューと課題—1970年以降の実証研究を中心に—」野々山久也他（編）『いま家族に何が起きているのか』ミネルヴァ書房
- 乾順子 2014「既婚男性からみた夫婦の家事分担—一家父長制・資本制概念と計量研究の接合—」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』40: 93-110
- 乾順子 2015「高齢期夫婦の家事分担」『季刊家計経済研究』105: 56-67、家計経済研究所
- 石井クンツ昌子 2004「共働き家庭における男性の家事参加」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容：全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会 pp. 201-214
- 石井クンツ昌子 2009「父親の役割と子育て参加：その現状と規定要因、家族への影響について」『季刊家計経済研究』81: 16-23
- 岩井紀子 1997「夫の家事分担に関する日米比較研究—NSFH と神戸調査—」石原邦雄編『公共利用マイクロデータの活用による家族構造の国際比較研究—米国 NSFH 調査データの利用を通して—』
- 岩井紀子 2004「高齢期の夫婦における夫の家事分担」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容：全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会、pp. 293-309
- 松田茂樹 2004「男性の家事参加—家事参加を規定する要因」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容：全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会、pp. 175-189
- 松田茂樹 2006「近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化」『季刊家計経済研究』71: 45-53
- 永井暁子 1992「共働き夫婦の家事遂行」『家族社会学研究』4: 61-77
- 永井暁子 2004「男性の育児参加」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容：全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会、pp. 190-200
- 佐藤裕紀子 2010「コーホート分析法による男性の家事労働時間の動向分析」『生活経営学研究』No.45 総理府統計局 社会生活基本調査 <https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/index.html> (2021年3月15日アクセス)
- 塚本利幸 2004「男女間の家事分担と地域特性に関する考察—女性就業率高位の福井県を事例として—」『日本ジェンダー研究』7: 29-41 日本ジェンダー学会
- 筒井淳也 2011「日本の家事分担における性別分離の分析」『第3回家族についての全国調査 (NFRJ08) 第2次報告書』pp. 55-73. 日本家族社会学会 全国家族調査委員会
- 梅田悟司 2019『やってもやっても終わらない 名もなき家事に名前をつけたらその多さに驚いた。』サンマーク出版
- 第6回全国家庭動向調査 2019 <http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ6/Kohyo/Kohyo.asp> (2021年4月5日アクセス)
- Coltrane, S., 2000, "Research on Household Labor : Modeling and Measuring the Social Embeddedness of Routine Family Work.," *Journal of Marriage and Family*, 62(4): 1208-1233.
- Noonan, M. C., 2001, "The Impact of Domestic Work on Men's and Women's Wages," *Journal of Marriage and Family*, 63(4): 1134-45.

Men doing the household and childcare in Miyagi Prefecture, Japan

Kayoko FUJITA

I surveyed 700 working men in Miyagi prefecture about sharing household tasks in the family. The results showed the following. First, they do the household tasks and childcare much more than the average men in Japan. And they also do invisible housework chores much more, too. Second, I analyzed the data by multiple regression. The results of the analysis of the determinants of male household chores did not indicate the relative resource hypothesis. They support their wives much more in everyday life compared with the average Japanese men. An analysis of the determinants of their childcare showed that spouse's income and employment work were significant, supporting the relative resource hypothesis.